論文の和文要旨

論文題目	日本人英語学習者による関係節の習得に関する コーパス多因子分析
氏名	高橋 有加

本研究の目的は、日本人英語学習者の関係節の発達傾向に関するコーパスを用い、多様な習得に関わる要因を関連付けながら総合的に分析を行うことである。この目的を達成するために、学習者コーパス、検定教科書コーパス、母語話者コーパスの 3 種類のコーパスを用いて、異なる習熟度の学習者による関係詞の使用傾向を分析した。関係節の使用を、(1) 学習者コーパスにおける関係代名詞の表層形ごとの頻度、(2) 学習者コーパスにおける関係節の習得難易度を表す SLA 理論に基づく関係詞の分類による頻度である Noun Phrase Accessibility Hierarchy（NPAH; Keenan & Comrie, 1977）および Subject-Object Hierarchy Hypothesis（SOHH; Hamilton, 1994）の分析を核として、それら学習者コーパスの出現パターンを (3) 母語話者の使用頻度、(4) 日本人英語語学習者にとって主要な input である検定教科書における頻度と比較し、かつ (5) 関係節が使用される具体的な文脈要因の影響、(6) 関係詞のエラー分析、(7) 関係代名詞の省略の使用頻度、(8) 関係節の回避の程度、といった複数の要因に関しても総合的に検証した。これらすべての分析を CEFR レベルの観点に照らして検討することにより、特定の CEFR レベルを特徴付ける基準特性 (criterial features) の抽出を試みた。それを基準特性の代表的なパターンとして a) 正の言語特徴、 b) 負の言語特徴（＝誤用）、 c) 正の言語使用分布、 d) 負の言語使用分布、の 4 種類の分類に基づき分析した。

まず、学習者と母語話者の関係代名詞の比較のため、学習者コーパスとして中高生の書き言葉コーパ

スである JEFLL Corpus と大学生のコーパスである ICNALE Written Essays から日本人英語学習者の書き言葉のデータを用い、表層形（that, which, who, whose, whom）の頻度と、NPAH, SOHH のタイプごとの CEFR レベル別頻度を集計した。その後、これらの学習者の結果を、母語者話コーパスである BNC Baby の集計結果と比較した。その結果、関係詞の表層形全体としては、学習者と母語話者データの両方で that、which、who が主要なものとして使用され、whose、whom の頻度が非常に少ないという点で一致していた。これは学習者と母語話者が類似する特徴で関係詞の表層形が正用の言語特徴が一貫しているところから基準特性と特定できるとした。ただし、JEFLL では CEFR レベルが上がるにつれて一人当たりの使用頻度が上昇する傾向があった。一方 ICNALE では B1 でやや使用頻度が下がり、B2 でまた上がる傾向があり、ICNALE では作文タスクの制御が厳しい分、トピックの影響が JEFLL よりも強く出ていたと思われる。

2 つの学習者コーパスにおける SLA 理論に基づく関係節のタイプの頻度は NPAH および SOHH の階層に従った頻度となり、各 CEFR レベルの中でもこの階層に沿った頻度となることがわかった。一方、英語母語話者のデータでは DO よりも IO/OBL の使用頻度の方が高い傾向となり、既存の類型論の仮説に一部従わない部分が見られ、この点で学習者と母語話者の分布が一致しなかった。

英語教科書コーパスと JEFLL の学年別比較では、明確なインプット・アウトプットとしての関係は見出せなかったが、教科書コーパスでは、各学年で特に焦点が置かれている表層形があることが示された。また、学習者コーパスにおける表層形別の頻度は、インプットとしての教科書における頻度よりも、エッセイのトピックに影響を受けていることが示された。

明示的に使用された関係詞だけでなく、各コーパスからは省略された関係詞（zero-relatives）も構文解析データを用いて抽出した。学習者コーパスと教科書コーパスにおける省略の頻度は、明示的に使用されている DO と IO/OBL を足した頻度の推移に合わせて増減している傾向があることが示唆された。

これまでに述べた関係詞の頻度の分析の後、母語話者と対比した第二言語学習者の言語使用の特徴を抽出する回帰分析（MuPDAR; Gries & Adelman, 2014; Gries & Deshors, 2014）を用い、どのような変数が最も関係代名詞の選択を予測できるかを解析した。その結果、BNC Baby と 2 つの学習者コーパスに基づくモデルでは、先行詞の有生性 (animate vs. inanimate)、NPAH（SU, DO, IO/OBL, GEN)、限定性

（restrictive vs. non-restrictive）、ジャンル/トピックの４つの変数が最終的に予測変数として残り、母語話者も学習者もほぼ同じ予測変数が最終モデルで保持されていることが確認された。CEFR レベル、節の長さ、SOHH で予測できる関係節の埋め込み位置といった変数も分析には含まれていたが、重要な変数には残らなかった。重要な変数として残った４つの変数は、関係詞の表層形の選択に関わる変数であるため、英語の関係詞の用法を考えると妥当な結果であると言える。

また、学習者コーパス内の関係節を含んだ文に関してはエラー分析も行われた。JEFLL では A1 から B1 にかけてエラー数とエラータイプの増加が見られ、エラー率は A1 から B1 にかけて徐々に増加した。一方、ICNALE では、JEFLL よりも誤りの種類が少なく、A2 から B2 にかけて、be 動詞の欠落や前置詞の欠落といった省略の誤りが多く見られた。全体として見ると、関係詞そのもののエラーというよりも、関係代名詞に導かれる節内の同時に使用する文法（動詞の時制・相、態、など）のエラーや、日本人にとって使用が困難な関係節および関係節を含んだ文全体の語順の誤りといったエラーが目立つ傾向があった。これらの誤りの特徴は関係代名詞そのもののエラーではないが、関係節が引き起こす節内の文法構造の複雑化という意味で「負の言語特徴」になりうる。

さらに、コーパス分析に加えて、高橋（2017）で使用されていた２つの描写タスクを用いて上級レベルの学習者を加えた上で関係節の回避現象の特定および関係詞の代わりに使用できる修飾構造にはどのようなものが使用されているかを調査した。実験では、1 回目と 2 回目のタスクに使用された絵は全く同一だが、2 回目のタスクでは「できるだけ英文の中に関係代名詞を使って書いてみてください」という指示が加えられた。1 回目と 2 回目のタスクにおける関係代名詞のエラー率を比較することにより、強制的に使用させた場合に誤りが多かったものは、誤りを恐れた関係代名詞の回避を行った可能性が高い、という仮定の下、回避がどれくらい起こっているかを調べるとともに、同一被験者が 2 回目の作文で関係詞を用いて説明した内容が、1 回目の作文ではどのような文法項目を用いて表現されていたかを対比したデータを作成・集計した。結果は、CEFR の A レベルの学習者と B1 レベルの学習者は、B2 レベルや C1 レベルの学習者に比べて関係節を回避する傾向が全般的に高いことが分かった。また、関係詞の代わりに用いられている代替構造を検討した結果、A レベルに比べて、B レベルの学習者の言い換えのレパートリーが全般に多様になっていることがわかった。これらも「正の言語特徴」と位置づ

けることができる。

本研究では、英語学習者、教科書、母語話者コーパスの使用による多因子分析により、各習得段階における関係詞構文の出現を第２言語習得仮説に基づき各コーパスの頻度と分布を調査し、同時にエラー分析や、省略・回避行動などの特徴的な発達パターンを比較調査することで、日本人英語学習者の関係節の使用法の複雑な実態を明らかにすることができた。